

(一) ハロゲン元素の常温に於ける状態と其の銀化合物に就て知る所を記せ

(二) 昇汞百分ノ一「モール」水溶液五〇立方センチメートル中にある水銀の重要を示せ

但し水銀の原子量二〇〇、鹽素の原子量三五、五とす

(三) 次の詞の意義を説明せよ

硬水、乾溜、蒸溜、還元、鹽化

昇華、潮解、風化、熱離、電離

(四) 左の化合物の分子式を記せ

(イ) 蟻酸 (ロ) 醋酸 (ハ) エーテル (ニ) アニリン (ホ) グリ

セリン (ク) エタン (コ) フォルマリン (チ) クロ、ホルム

▲自在畫 (四時間)

植物寫生 (鉛筆畫水彩畫及び毛筆畫の何れによるも隨意とす)

▲用器畫法 (三時間)

(1) 圓に内接する正五角形を描け。

(2) 正六角柱 (高さ一寸五分端面の一辺六分) あり底の一角に於て水

平面上に立ち具軸同面に30°傾斜し而して一脇面は直立面に平行

なり 其投影圖を求む。

(3) 正方錐と圓柱との相貫體の投影圖を求む。

但し正方錐は底の一邊直立面に45°をなして水面平面上に直立し圓

柱の軸は錐体の軸と互に中央に於て直交し且兩畫面に平行なり。

(兩立体の大きさは任意とす)

⑦ 柱人社

本校校友会文学部の短歌会同人が、展覽会をやらうと大正四年春に結成したのが黒耀社であるが、その活動を通じて知りあつた若い工芸家六人で大正六年六月に結成されたのが「柱人社」である。六人の同人は、發起人となつた高村豊周、広川松五郎、小倉淳の三人に、堀義二、斎藤佳三、原三郎であつた。

「柱人社の展覽会は、大正七年に神田小川町の流逸荘でやつた。流逸荘というのは、仲省吾が経営した当時の尖端をいった美術店で、その名前は小川町の地名に因んで岩村先生がフランス語を振つて流逸荘とつけたものだ。陳列品も凝つたものだし、お客も趣味の洗練された人が良く集まつた。この店は、大正十二年の大震災に焼けるまで続いたが、流逸荘のお客が柱人社に非常に同情してくれて、よく作品を買ってくれた。金子良吉、芝川照吉、これは当時の知名の実業家だが、夫人や子供連れでよく買物にみえた。貴族院議員の伯爵で統計学の權威だつた柳沢保恵も来た。黒田清輝先生も夫人と一緒にみえて、いつも何かしら買物をして下さつた。岩村先生が激励に来られたのも勿論である。この時分から既に気がついていたのだが、我々の展覽会に来てくれるのは油絵や彫刻の人が多くて、肝心の工芸家の先輩は殆んど見に来てくれなかつた。我々の行動を異端視していたのかもしれない。」

(高村豊周著『自画像』)

柱人社は、展覽会を一回開いた後、小倉淳が大正七年十二月に急死したこともあって解散してしまいが、それは装飾美術協会結成へつながる発展的解散であった。

⑧ 本多利実死去

『東京美術学校校友会月報』第十六卷第六号所載の追悼記事（屋代晃江著）によると、本校校友会には明治二十四、五年頃から同三十年頃まで弓術部があり、一時期中絶した後、同三十五年二月に復活した。本多利実はこのとき師範として招聘され大正六年十月十三日死去するまでの十六年間指導にあたった。本多家は竹林派の弓術をもって代々徳川幕府に仕え、利実は天保七年に生まれ、もとの名を橋之助または廣といい、生弓齋と号した。明治維新後大学史生、文部史生、内務少録、巢鴨村長等を経て明治二十六年芝西久保八幡神社祠官となつてからは弓術界のために尽くし、第一高等学校、日本体育会弓術部、本校、東京帝国大学、華族会館、学習院、千葉県師



本多利実

範学校、千葉医学専門学校、真宗大学、大日本弓術会等の弓術指南をつとめ、大正五年には弓道館を興して館長となり、その名声は一世を風靡した。晃江はその弟子で、彼は師の歿後、本校弓術部副指南および東京帝大弓術教導補助となった。

⑨ 香川勝広死去

もと教授香川勝広の死去を『東京美術学校校友会月報』第十五卷第七号は次のように伝えた。

○香川勝廣氏逝去 香川勝廣氏胃癌を患ひ一月十五日遂に逝く、〔大正六年〕翁は幕末の彫金大家野村勝守の門に出で、更に加納夏雄翁に就て學ぶ所あり、故海野勝珉翁と並び稱せられ、遂に帝室技藝員を命ぜらるゝに至る、明治三十一年本校教授に任ぜられしが翌三十二年六月退職す、日清戦役當時先帝御佩用の菊一文字の御劔の裝飾を命ぜられ前後四年に互り苦心製作せしもの、翁一代の傑作なりと傳へらる、其得意とする所は片切彫なりしと云ふ、享年六十五歳。

なお、『美術新報』第十六卷第四号（大正六年二月）にも訃報と略歴が掲載されている。

⑩ 沢村専太郎（号胡夷）のインド旅行

沢村専太郎は明治四十二年、京都帝国大学文学部哲学科（美学美術